

僕の甘い夏

南部中・2 田中 星丞

僕の今年の夏のささやかな、いや、一番の楽しみは、かき氷をほおぼって食べることです。僕は、もともと抹茶味の食べ物が好きなので、宇治抹茶のかき氷を好んで食べています。

このような楽しみが味わえるのは、父のおかげです。夏の始まりの頃に、父がかき氷機を買ってきたのです。その日から家でもかき氷が作れるようになり、いつでも楽しめるようになりました。かき氷屋さんのような、大きくてふわふわの氷というわけにはいきませんが、家にいながら出来たてのかき氷が楽しめるのは、父に感謝しなくて、ありがたうという気持ちで、心もお腹もいっぱいでした。

かき氷機の入っていた袋を開け、準備をして電源を入れ、僕は家族の中で一番にかき氷を作ることになりました。何もわからず初めてのことには、どきどきする僕ですが、その時はわくわく感しかありませんでした。かき氷絵を作るのに使う氷は、大きな塊ではなく冷凍庫にある小さい氷です。だから、作っているときの音は、かき氷屋さんのようなシャカシャカという音ではありません。それでも、氷が削られるたびに、お椀の中にさらさらとした氷が入っていく様子は、見ていて爽快でした。今まで、かき氷屋さんでやっていたことを、自分がやっているような気になり、とても楽しく感じました。かき氷を削っている最中は、近くで見ていることもありますが、削った氷が自分に向かって飛んできます。それが顔や体に当たって冷たく感じるのもおもしろかったです。

お椀いっぱいにあふれそうなほどかき氷ができ、今度はシロップがけです。お椀に耳を近づけるとシャカシャカという音が聞えてきて心地よくなりました。かき氷機と一緒に父は、シロップも買って

きてくれてありました。屋台や食べ放題のお店などで、かき氷に自分で好きなシロップをかけることができることもあるのでしようが、僕は、そのような機会は今までありませんでした。かき氷にはいつも、既にシロップがかかっているものや、味がついているものしか食べたことはありませんでした。だから、シロップがけは、僕にとって初体験でした。父が用意してくれたものは、いちご、メロン、ブルーハワイ、僕の好きな抹茶、さらに練乳までありました。一つ一つ開けてみると、どれもよい甘い香りがして、一層わくわく感が高まりました。僕は、全部がけというのもいいなと思ったのですが、悩んだ結果、抹茶を選びました。

さっきまで真っ白だった氷がみるみる緑色に染まっていく様子を見て、僕はきれいだなと思うより、早く食べたいという気持ちが高まりました。眺めるなんて気持ちは全くなく、シロップをかけてすぐに一口ほおぼってしまいました。お店で食べるものとは違うので、氷の粒や、シロップの味などがやや劣っているように感じましたが、氷は思っていたよりやわらかく、急いでほおぼったため、こめかみのあたりがキーンとする感じがたまりませんでした。

それから僕は、特に暑い日や、疲れたときにかき氷屋さんに行くようになりました。お店では、家の数倍大きなかき氷が食べられるということだけでなく、どうやってバランスよくかき氷を作り、さらにこの山を保っているのかを勉強するためです。ただ、お店のものには、一つでお腹がふくれてしまいます。家ではそのようなことはないのです、お店のものは、本当に大きいんだなということと、氷の塊を削ったものでお腹が膨れるということが不思議に感じました。この夏の僕の楽しみと趣味は、かき氷を食べることでした。確にかき氷は、夏に一番合うのですが、今年の夏ほどかき氷を存分に楽しんだ夏はありませんでした。悔いはないといってもよいほどです。シロップ一つをとっても、単体で使うだけでなく、複数を混ぜて新しいフレーバーを作り出していました。時々、失敗と思う味も

ありましたが、自分好みのよいフレーバーができるとう達成感を感じることができました。作り出すときは、研究者のように準備し、混ぜ合わせていました。作る過程も楽しかったです。そんな僕の姿に母や祖母は、

「食べ物とか飲み物とか、粗末にしちやだめだよ。」

と言ってきました。気づくとかき氷を作って、新しいフレーバーを開発していたので、おかげで、心配されて作る回数を制限することになっしまいました。

父の買ってきてくれたかき氷機のおかげで、今年の夏は、甘い夏を過ごすことができました。次の夏も、今年を超える甘い夏にしていけたらなと思っています。

3・9

冷たく、甘いかき氷に対する星丞さんの熱い思いが、伝わってきます。研究の成果から、ひと夏の思い出だけでなく、今後の夏の楽しみの一つに加わることを期待します。

(指導 二橋 嗣 予)